

久留米城外郭遺跡

— 第18次発掘調査報告 —

平成25(2013)年2月

久留米市教育委員会

序

久留米市は筑紫平野の中心付近に位置し、耳納山地の緑と筑後川の水など、豊かな自然に恵まれています。平成17年2月の広域合併後、平成20年4月には中核市となり、福岡県南地域の中心都市として発展しています。このような発展を築き上げてきた先人達は、多くの文化を創造し、市内各所にはその足跡である貴重な歴史遺産が多く残されています。

本書で報告する久留米城外郭遺跡は、元和7（1621）年に有馬豊氏が久留米城に入城した後に造営されたもので、現在の久留米市中心部の形成に繋がるものです。今回の店舗建設に先立つ調査でも、土塁や外堀などの久留米城に関連する遺構・遺物が確認され、貴重な成果を得ることができました。

今回の発掘調査とその成果を収録した本書の発行によって、地域歴史の解明、さらに文化財保護の理解や普及、生涯学習等に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました[]氏や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成25年2月28日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、店舗建設に先立ち[]氏の委託を受けて実施した、久留米城外郭遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査に係わる事務は、久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の廣木誠が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、廣木・大淵文子・中野ゆみが行った。また、本書に掲載した遺物の実測は非常勤職員の中里由佳絵が行い、図面の浄書は非常勤職員の古賀子が行った。
4. 本書に掲載した遺構写真は、マミヤ RB67 を用い6×7判で廣木が、遺物写真はニコンデジタルカメラを用い当課の塚本映子が撮影した。また、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
6. 本調査の略記号はLNG-018、調査番号は201211である。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
8. 本書の執筆・編集は廣木が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 久留米城外郭遺跡の位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	13

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、店舗建設に伴う事前の発掘調査である。平成24年4月11日、[]氏より、久留米市通町1-2における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である久留米城外郭遺跡に含まれ、当地では平成8年度に外郭の南東隅にあたる土塁部分の確認調査を実施している。今回の店舗建設に伴う工事は土塁基底部に達することが確実であったため、開発対象地内の店舗建設予定部分について発掘調査が必要である旨を回答した。協議の結果、調査費用を原因者負担とし、平成24年5月18日に[]氏から「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成24年5月22日に[]氏と久留米市長檜原利則は「久留米城外郭遺跡第18次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地調査は、平成24年5月29日から6月26日に実施し、出土品整理・報告書作成に係る契約は平成25年2月28日までである。

2. 調査に係わる体制

調査委託：[]

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：辻 文孝 次 長：佐藤光義

文化財保護課 課 長：古賀 正美

課長補佐：園井正隆 課長補佐兼課主査：宮崎俊一

課 主 査：白木 守 辻 義則

庶務担当：豊福早苗

調査担当：廣木 誠 整理担当：古賀和子 中里由佳絵

発掘調査臨時職員

秋永絹子・大淵文子・椎島一男・川原初美・古賀勝治・佐藤朱美・高尾幹幸・中野ゆみ・

溝口輝男

発掘調査整理臨時職員

小本美沙子

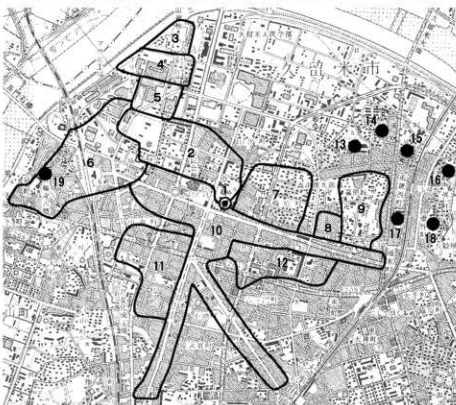
II. 久留米城外郭遺跡の位置と環境

久留米城外郭遺跡は久留米市街地の中心部に位置し、現在の町並みでは城南町と篠山町を中心とし、北東部分が日ノ出町、南東の一部が通町に相当する。一帯は官庁地区・文教地区・工業地区・商業地区として多彩な面をもち、大きく発展を遂げてはいるものの、道路や神社、堀や土塁の痕跡など往時の姿が随所に息づいている。なお、今回の調査地点は本遺跡の中では南東隅にあたり、標高13mを測る低台地上に位置している。

本遺跡の東方には弥生時代の甕棺墓地である石丸・辻・南薫稻荷遺跡や同時代の集落跡である東櫛原今寺・南薫本村遺跡、奈良・平安時代の墨書土器が出土した南薫西遺跡などが展開する。久留米市街地における久留米城・城下町関連の調査においても、中世以前の遺構・遺物が出土することもあり、本来は広範囲に前時代の遺構が広がっていたものと考えられるが、元和7（1621）年に入国した有馬家が久留米城・城下町の整備を進めたことによって、大部分の遺構が消滅している。

久留米城の築城時期は永正年間と伝承されているが、明確ではない。久留米城が本格的な城として整備されるのは豊臣秀吉の国割によって毛利秀包が入城してからである。関ヶ原合戦後、筑後国一国の領主となった田中吉政の頃には久留米城は本城である柳川城（現柳川市）の出城の一つに位置付けられ、吉政の次男吉信が在城したと伝えられる。毛利・田中両家の治世には小規模な城下町もあったようであり、両替町遺跡においてキリシタン大名であった毛利氏代の教会跡や大溝が確認されていることは特筆される。

田中家の断絶後、元和7年有馬豊氏が筑後北半国21万石の領主として封じられた。入国当時、久

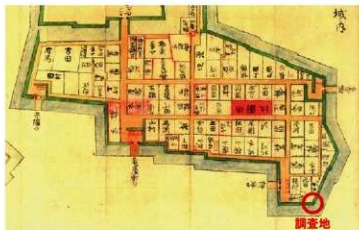


遺 跡 名

- 1 調査地点
- 2 久留米城外郭遺跡
- 3 久留米城本丸
- 4 久留米城二ノ丸
- 5 久留米城三ノ丸
- 6 京限侍屋敷遺跡
- 7 櫛原侍屋敷遺跡
- 8 鉄砲小路遺跡
- 9 寺町
- 10 久留米城下町遺跡
- 11 庄島侍屋敷遺跡
- 12 十間屋敷遺跡
- 13 東櫛原今寺遺跡
- 14 石丸遺跡
- 15 辻遺跡
- 16 南薫稻荷遺跡
- 17 南薫西遺跡
- 18 南薫本村遺跡
- 19 日輪寺古墳

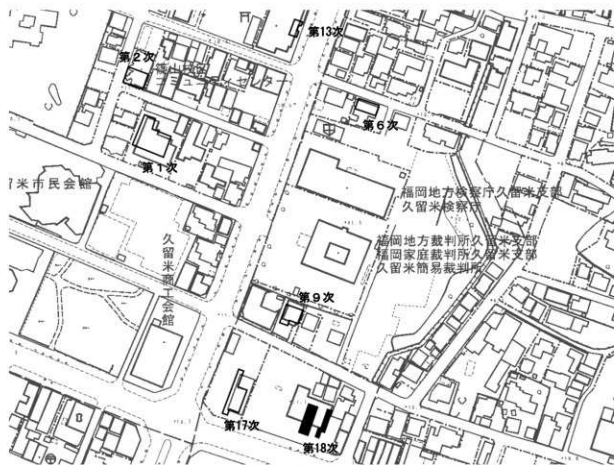
第1図 久留米城外郭遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

留米城は一国一城令によって荒れ果てており、豊氏は藩内の有力商人宅に仮寓していたと云われる。この状態から城と城下町の再整備は進められた。まず東向きの旧城を南向きに改め、城を拡充した。外郭もこの際に整備されたものである。また、城の拡張に際して寺社や町人を移転させることで城下町を拡大し、各町筋や寺町を整え、寛永・正保年間頃には現在の久留米市中心部の基本となる景観がほぼ形成された。



第2図 安政二（1855）年切絵図と第18次調査地

久留米城が大きく変貌するのは、明治7（1874）年に廃城となつてからで、この時に城内の構築物はほとんどが売却あるいは破却された。その後、広大な跡地を利用して学校校舎や工場が建設され、数回の区画整理も実施された。かつての久留米城の面影は、破却を免れた本丸石垣とその周辺の堀を除けば、城域の南東部の外堀や土塁の痕跡などが残り、また、建造物としては、近代洋画家坂本繁二郎の生家である武家屋敷や篠山小学校に移築された武家屋敷の長屋門などが残存している。



第3図 久留米城外郭遺跡第18次調査位置図（1/2, 500）

Ⅲ. 調査の記録

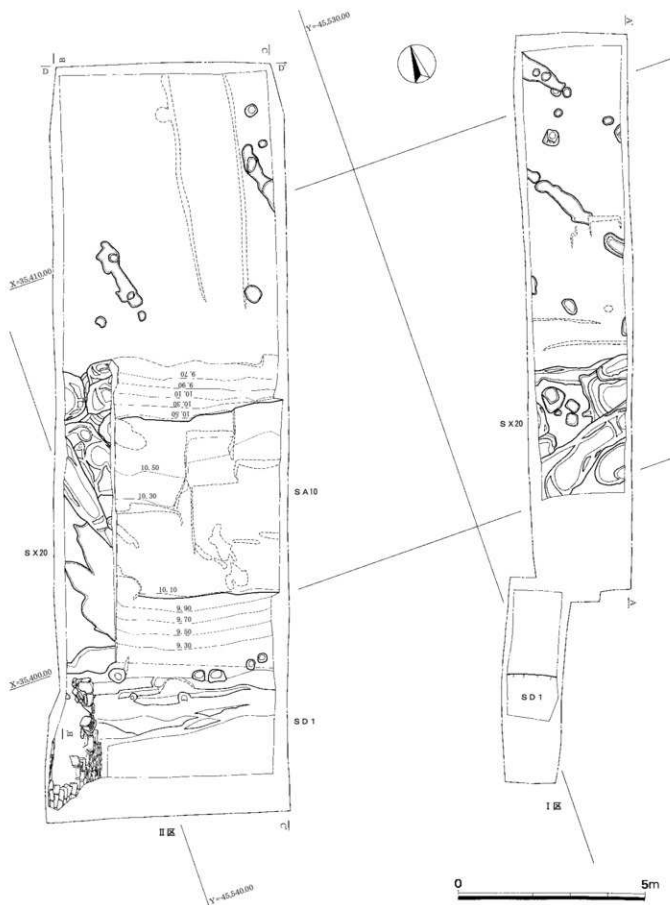
1. 調査の目的と経過

本調査地は確認調査を行った第3次調査地と同一地点にあたる。西70mには第17次調査地が位置し、北東100mには外郭を圍繞していた土塁の一部が現存している。第3次調査は平成8年度、第17次調査は平成22年度に行った。第3次調査では土塁の方向は明確にされていないが、土塁の規模や南東から北西へ傾斜をもつ盛土整形を行ったことが明らかとなっている。また、第17次調査では外郭の土塁や堀が検出され、土塁基底部における地業痕跡が確認されるなど注目される成果が得られた。今回の調査地は、絵図や立地から外郭南東張出し部の南東隅に相当し、過去の調査成果から外郭を圍繞する土塁と堀が検出されることは明らかであった。従って、その方向確認を主目的とし、調査を実施した。

現地調査は、土塁の積土の状況や基底部の構造などを確認するためのⅠ区と土塁の方向を確認するためのⅡ区を設定した。平成24年5月29日にⅠ区から重機による表土剥ぎを開始した。また、Ⅱ区では南北にトレンチを設け、土層観察を行った後、土塁状の高まりを残して表土剥ぎを実施した。表土を除去した部分から遺構検出を行い、その後、遺構の掘削を開始した。遺構実測、写真撮影は随時行い、6月12日にスカイマスターを用いて全景写真撮影を実施した。補足調査後の23・26日に重機で調査区を埋め戻し、発掘機材を撤収して、全ての現地作業を終了した。土層断面図(1/20)は手測りで作製し、それ以外の遺構実測はトータルステーションを用い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。遺構の記録写真は、マミヤRB67を用いてカラーリバーサル・モノクローム6×7判で撮影した。



第4図 久留米城外郭遺跡第18次調査区全景(北から)



第5図 久留米城外郭遺跡第18次調査遺構配置図 (1/100)

2. 検出遺構

本調査地の周辺地形は北から南へ緩やかに傾斜している。当地は長く宅地として利用され、先の店舗建設によって土塁の上部は大きく削平を受けている。調査地の基本層序は、表土が0.5m程度であり、従前の建物の基礎部分にあたる。この直下で土塁の積土を確認し、Ⅱ区北西側では近代以降の整地と推定される層を認めることができた。表土以下の残存状況は比較的良好で、地山面である黄褐色粘質土までの深さは北側で約1.3m、南側で1.6mを測る。

今回の調査では、想定された外郭の土塁と外堀を検出し、溝状遺構及びピットを確認した。また、土塁基底部では地業痕跡と考えられる遺構群が認められた。以下、主要遺構について概要を述べる。

土塁

SA10（第6～13図）

Ⅱ区南側で検出した。検出規模は高さ約1.2m、基底部幅8.0m程を測る。高さについては第3次調査の記録から4.3m以上であったと思われ、基底部幅については郭内側の端部が同調査時のトレンチにより正確な位置を確認できなかった。

このため、土塁の方向についても詳述はできないが、Ⅱ区西壁北側と北壁西側を除く部分で土塁の積土と考えられる層を確認できたことから、外郭を囲繞する土塁はⅡ区西壁中央付近から北東に方位を変え、郭内部におけるコーナー部分を形成していたものと考えられる。

土塁の積土は版築状を呈さず、土盛りを行ったような雑な印象を受ける。Ⅰ区東壁の観察では、調査区中央付近に土手状に土盛りをした後、南から北へ積土を施していったと推測され、Ⅱ区東壁北側でも同様の様相を呈する。また、Ⅱ区北壁東側では、東から西へ土を盛った状況を



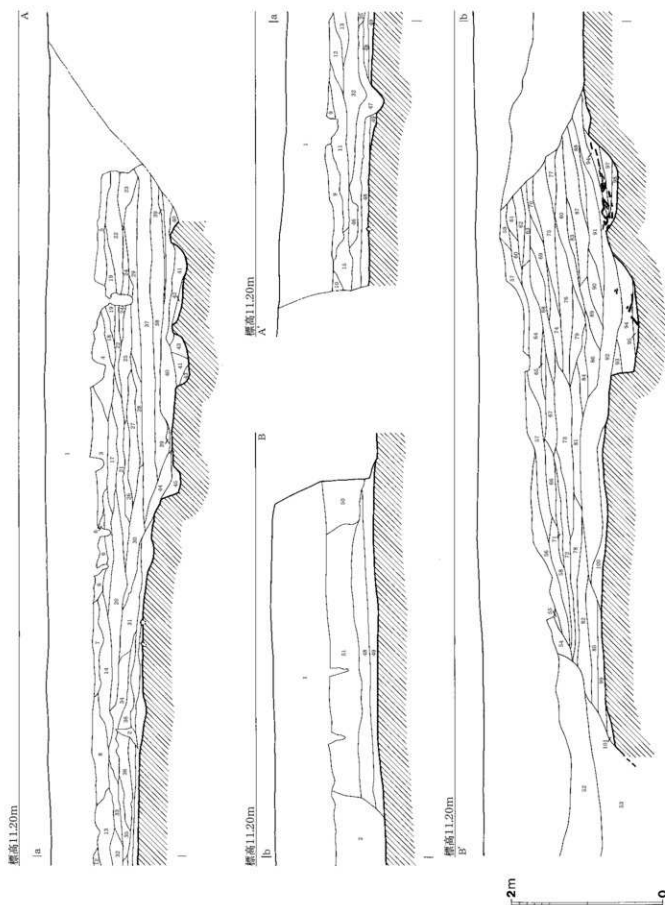
第6図 Ⅱ区西壁SA10積土状況（北東から）



第7図 Ⅱ区SA10基底部検出状況詳細（北西から）



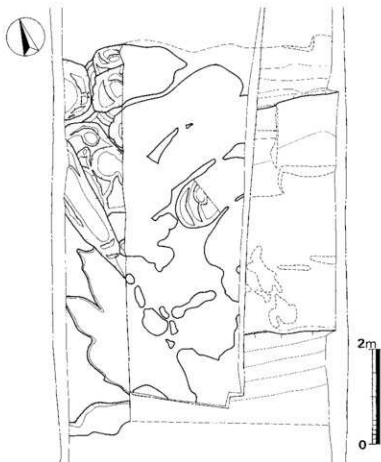
第8図 Ⅱ区SA20遺物出土状況（南から）



第9図 I区東壁・II区西壁土層図 (1/50)

看取でき、第3次調査で指摘された積土の状況と矛盾しない。一方、Ⅱ区西壁では、北から南へ積土を行い、順次高さを増していったものと思われる。

各調査区の南側、土塁の基底部にあたる位置では、土坑・溝状遺構（SX20）を複数検出した。規模は一定ではないが、およそN—10°—Wのものとしてこれに直行しているものがあり、検出面では土器片や小礫などを敷き詰めた状況を確認できた。埋土は褐色土や灰褐色土を基調とし、多量のブロック土を含む人為的な堆積である。また、これらの遺構、特にⅡ区SX20からは多くの瓦片が出土した。瓦は5 cm程度から拳大のものが多く、敷き詰められた様相を呈する。



第11図 Ⅱ区SX20平面図（1/80）

なお、補足調査として、Ⅱ区SA10の断割調査を行った。結果、部分的に認められたSX20の広がりを確認した。また、一部の遺構を半裁し、土器片・瓦片が敷き詰められている状況を追認することができた。以上から、SX20はSA10の下部に東西方向に広がっているものと考えられ、土塁基底部における地盤強化などを目的とした地業痕跡と推定される。



第12図 Ⅱ区SA10断割状況（北から）



第13図 Ⅱ区SX20土層（南西から）

溝

Ⅱ区南側でSD1を、各調査区の北側で溝状遺構を検出した。北側で検出された溝状遺構は、調査区外に至るものも含まれるが、長さが約1.2～1.9m、幅0.3～0.5m程を測り、深さが約5cmである。いずれも平面形は歪な形状を呈し、埋土は褐色土であった。遺物は出土していない。SD1については、以下に詳述する。

SD1（第9・10・14～16図）

Ⅱ区南側で検出した。久留米城の外堀にあたるものと考えられる。また、西壁沿いでは石垣を確認した。外堀は現地表から深さ約3mまで掘削したが、湧水と危険防止のためそれ以上の掘り下げを実施していない。幅も現道下まで広がるものと推定され、規模については詳細不明である。

土層観察によると、外堀北側部分は廃城後にその形態を残しつつも順次南側から埋没が進み、戦後、戦災土壌によって完全に埋められたものと推定される。埋土内からは、陶磁器片・瓦片・レンガ片・ガラス製品が出土し、出土遺物からも最終埋没は戦後に下と考えられる。なお、Ⅰ区南側に外堀の方向確認のためのトレンチを設定し、上面確認を行った。結果、外堀は南東方向にほぼ直線的に伸びることが判明している。

石垣は基底部の検出には至らず、築石と土層の一部からの観察であり、石垣の具体的な構造を明確にすることや、造成時期の指標となる遺物の検出はなしていないが、以下の点を確認できた。

石垣は堀の法面を利用して作った下部（第9図第53層）と土塁を切って築造した上部（第9図第52層）に分けられる。築石は下部で長さ30cm、厚さ5～20cm、奥行50cm程、上部で30～40cm角の切石が用いられる。石積みは、下部が布積み小端積み、上部が布積み切込接ぎである。全体として間石は認められない。また、縦目



第14図 SD1土層（西から）



第15図 確認トレンチSD1検出状況（南から）

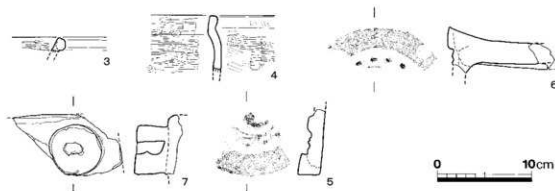


第16図 石垣検出状況（東から）

地は通らず、石は安定している。天端石の中には、奥行は不明だが、長さ約 70 cm、厚さ 15 cm 程を測る上面が平らな大ぶりの石が使用されていた。石垣の傾斜角は 61° で、直線的である。裏込は、下部が灰色粘質土、上部が黄橙色ブロック土・粒状土を多く含む明灰色粘質土を呈し、裏込石として下部が小礫、上部が拳大の割石を多用していた。

3. 出土遺物

出土遺物はパンコンテナ一箱程度で、遺物の大半は S D 1・S X 20 から出土した。特に瓦の出土量が多く、S X 20 全体で鬼瓦片 1 点、軒瓦片 2 点、丸瓦片 41 点、平瓦片 311 点が出土し、土鍋片 3 点、瓦質土器鉢片 1 点、土器細片 1 点も確認できた。瓦については軒瓦と遺存状態が良い丸瓦・平瓦以外は、調査段階で選別の上、現地にて廃棄しており、先述のコンテナ数には含まれていない。5・6 は軒丸瓦である。5 は右巻き巴文で、5・6 いずれも珠文は小さく、間隔は広い。7 は鬼瓦の一部と考えられ、円柱形の素地に孔を穿ち、貼り付け後焼成を行う。調整はケズリを施し、一部工具痕が残る。その他の遺物の詳細については、出土遺物観察表を参照されたい。



第17図 出土遺物実測図 (1/4)

第1表 出土遺物観察表

遺物 NO.	出土 遺物	種 別	形 状	寸 法			色 調				胎 土	備 考	登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	高さ (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第18図	S D 1	ガラス	瓶	2.8	4.5	12.85	青緑				ガラス	編製「久留米牧牛機 式會社」全乳	201211 000001
2 第18図	S D 1	ガラス	瓶	1.8	2.65	10.0	透明				ガラス	編製「ヤタルト」 「人器保護画」	201211 000002
3 第17図	S X 20	土師器	土鍋	—	—	(1.70)	橙	橙	ナデ	刷毛目	砂粒(長石・石英・雲母・ 角閃石・赤色砂子)		201211 000003
4 第17図	S X 20	瓦質土器	鉢	—	—	(6.5)	灰黄褐 にぶい黄緑	黄褐 にぶい黄緑	ナデ	刷毛目	砂粒(長石・石英・雲母・ 赤色土粒)		201211 000004
5	S X 20	瓦	軒丸瓦	—	—	(2.45)	灰白 灰黄	灰白 灰黄	型押し ナデ	ナデ	砂粒(長石・角閃石・雲母)	106 g	201211 000005
6 第17図	S X 20	瓦	軒丸瓦	(11.35)	—	(1.75~ 1.95)	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ ケズリ	細砂粒(雲母・角閃石・ 赤色砂子)	330 g	201211 000006
7 第17図	S X 20	瓦	鬼瓦	(6.3)	(11.5)	—	黒 灰褐	黒	ケズリ	—	細砂粒(雲母・角閃石・ 長石)	工具痕残存 226 g	201211 000007

口径(長)・底径(幅)・器高(厚)の単位は cm である。

() は現存値。色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1997年版)による。

登録番号は久留米市市民文化部文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



第18図 出土遺物（写真）

IV. 総括

久留米城外郭遺跡第18次調査では、調査前の想定通り土塁と外堀を検出し、その他に石垣、溝状遺構を確認することができた。最後に、これらの遺構について整理を行い、総括としたい。

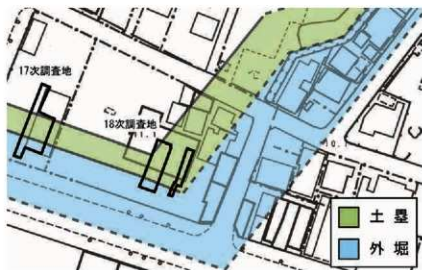
土塁と外堀の築造時期については、出土遺物に乏しく、今回の調査でも特定はできなかった。豊氏が入城した元和7（1621）年以降に、久留米城と城下町の整備が開始され、翌元和8（1622）年頃には、久留米城の縄張りは完成したと考えられている。この頃に築造が開始されたと考えられるが、完成時期も含めて詳細は不明である。ただし、外堀については出土遺物と土層観察から最終埋没が戦後に下ることが判明し、第17次調査の結果を追認することができた。

土塁の構造については、積土の状況は版築というよりも土盛りを行ったような粗雑な状況を示し、第17次調査の成果と同様である。一方で、積土の工程は本調査地西側および第17次調査では北から南へ、本調査地東側では南東から北西へ実施されたようであり、相違が認められる。作業単位や作業工程に起因するものか、あるいは補修、改修などの可能性も考えられるが、詳細は判断できなかった。

地業痕跡は、先の調査で畝状の掘り込みが確認され、粗朶を用いた可能性が指摘されている。本調査においては粗朶の認定には至らなかったが、瓦片や土器片、小礫を敷き詰めた溝状・土坑状の掘り込み（SX20）を検出しており、土塁基底部における地業痕跡と考えられる。また、畝状の掘り込みは土塁の方向に概ね直行・並行していることから、土塁の方向を意識し掘削されたものと推定され、地業痕跡の方位は土塁の方向を示唆する材料の一つになると思われる。

土塁と外堀の方向については、土塁外部のコーナーと外堀の幅・方向に課題を残すが、土層観察、SX20の方位、また過去の調査成果や切絵図、現存する土塁の位置などから、第19図のように復元できる。なお、各調査区の北側で確認した溝状遺構は、方位や埋土が類似するため一連の遺構と考えられる。これらは、推測の域を出ないが、土塁基底部内に収まり、その方向におおよそ直行することから、土塁の基礎地業の可能性も考えられる。

最後に、石垣については、外堀が廃城から戦後まで残存していたことから、本調査地と堀南側を結ぶ土橋の護岸として機能していたと推定される。



第19図 外郭南東部復元図 (1/1,500)

報告書抄録

ふりがな	くまめじょうそとぐるまいせき					
書名	久留米城外郭遺跡 一第18次発掘調査報告一					
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第324集					
編著者名	廣木 誠					
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課					
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp					
発行年月日	平成25年(2013)2月28日					

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
くまめじょうそとぐるまいせき 久留米城外郭遺跡 第18次調査	くまめし とおちちょう 久留米市 通町 1-2	40203	—	33° 19' 05"	130° 30' 39"	20120529 ～20120626	173㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
久留米城外郭遺跡 第18次調査	城館	近世	土塁	1条	土師器、瓦質土器、瓦、	調査地は久留米城外郭の南東 張出部の南東隅にあたる。調 査では、外郭を圍繞する土塁 と堀を検出した。また、土塁 基底部では地栗痕跡を、堀内 部では石垣を確認している。		
		近代	堀 石垣	1条 1条	ガラス瓶			
要 約								
調査地は久留米城外郭の南東張出部の南東隅にあたる。本調査では、外郭を圍繞する土塁と堀を検出した。土塁について は、本調査地を起点にコーナ一部分を形成することが判明し、基底部では地栗痕跡を確認している。また、堀については、規 模を縮小しつつも、戦後まで残存していたことが明らかとなり、その一部では土橋の護岸と考えられる近代の石垣を検出して いる。								
土木工事の届出日		平成 24 年 5 月 18 日			遺物の発見通知日		平成 24 年 6 月 27 日 (24 文財第 375 号)	

久留米城外郭遺跡

一第18次発掘調査報告一

久留米市文化財調査報告書 第324集

平成25年2月28日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 永松印刷

久留米市中央町20-22